月刊ペン文学賞作品

雀落とし

平　龍生

リユウが雀たちに熱心に餌付けをしようとしているのには訳があったー。リユウが大切に飼い育てていたひよこが《三日前》に死んでしまったのである。雀達はひよこの餌のこぼれを啄（ついば）むために毎日のようにこのベランダに姿を現わしていた。糠（ぬか）や、細かく刻んだ菜っ葉、砕いた米粒などがひよこが飼われていた段ボール箱の回りには、いつも、箱の回りにはいつも飛び散っていたのである。雀たちはこの餌付場に馴れていたはずなのに、いつも用心深か

った。リユウは予め、少しだけ開けておいたサッシの扉の隙間から雀たちを観察していた。ひよこが段ボール箱に体をぶつける音には一向に驚ろかないのに、リユウが少しでも近付こうとすると雀達は申し合わせたように一斉に飛び立ってしまうのだった。

段ボール箱には細工がしてあった。箱を伏せた下辺の四隅には椅子のような脚が四本ついている。風通しがいいように脚の部分だけを残して、あとは五センチほどの幅ではさみが入れられていた。下からひよこが潜り抜けないように工夫がしてあったのだ。時折り、ひよこが黄色い嘴（くちばし）の先を覗かせることがあったが、それ以上は無理であった。箱には丸い窓が十余りあった。嘴だけではなく、この破れ窓からは、ひよこ

は頭の部分も突き出した。あたりの気配を一人前の顔をしていつも窺っていたのである。まるで若鳥の真似事であった。

首の出し方だって、首の傾げ方だって小生意気な仕種に見えた。

リユウは窮屈な段ボール箱からひよこを出して時折りは散歩させた。急造の巣箱では運動不足になってしまう。隣の家との境界を潜り抜けないように、コンクリート床のベランダの両端には板で囲いがされていた。もうひよこは飼われてから四ヵ月になる。自い羽毛がニセンチばかり伸びてきた。体もリユウの片手では持ちきれない。両手で包み取るようにしてリュウが抱え上げる。何にもましてひよこの脚の部分は大人になる兆候をあからさまに示していた。ちょっと気味が悪いぐらいだった。筋

張っており、鱗（うろこ）になった足皮（そくひ）は固い枝を思わせた。見ようによれば餌物を鋭く掴み取る鷲（わし）の尖った脚ぐらいには見えた。ふわふわの柔らかそうな感触が、リュウのひよこからは日一日と失なわれていたのであった。ぴよぴよと弱々しそうになく、愛玩用のひよこではない。生きている強さのようなものを一羽のひよこは、このところ、ひけらかせ始めていたのであった。

啓介は、もう一度、リュウに声をかけた。

「雀をつかまえるんだったら、ほら、籠と割箸、それにひもの仕掛けが必要だぞ」

が、リュウは、やはり、啓介のことばを無視している。少し啓介が稚気なことを言い過ぎたせいだろうか。

ベランダの見える位置に布団を敷いて、啓介は餌撒きの一部始終を見ていた。

朝から、気分が秀れない。昨夜余り暑かったので夜中にベランダに出て涼んだ。そのせいか何となく体がだるかったのであった。

妻の芳枝はまだ隣の部屋で寝ている。いつも帰宅するのは夜中の一時頃であり、大体午前中くらいまでは寝ていることが多かった。近所の体裁も考えてキャバレー勤めの場所は一時間はかかる新興の街を選んでいた。啓介はその揚所が何処だかは知らない。昨夜も夫婦の間ではちょとした小競り合いがあった。

「家にばかりいないで、たまにはリユウと散歩でもしてやりなさいよ」

と、芳枝は父親のものぐさぶりを詰（なじ）ったのである。妻から見れぼ、朝から晩まで能もなく

ぶらぶらしている男に彼は見えたのだろう。啓介はいま自宅療養中の身、七月の末に半年振りで我家に帰って来た。腎不全で国立病院に入院していたのであった。腎臓疾患は不治の病いだということを、啓介はよく知っている。顔にむくみが出来、体中がだるくて仕様がないので国立病院に行ったらすぐさまの入院を求められた。

皮革製品の製造販売をやる小さな商事会杜は長期療養を理由に体よく彼の首を切った。転職して二年目の会社であった。療養給付を受けているものの一家が飢えをしのぐ救けにはならなかった。何しろ小康状態を保ちながら二年、三年と年をへて衰弱して行く厄介な病気である。啓介は家に帰れたことを快よくは思っていない。

大抵の患着達は一度は家へ帰さ

れる。彼と同室の患者たちも少しよくなったといっては家へ戻された。皆な嬉しそうであった。

が、大部分の者達はまた病院へ連れ戻される。それも入院した時と同じ様に歩いて病室にやって来る人は少ない。腎臓病特有の発作が起きて人事不省になっている人が多いのだ。大低は救急車の世話になっていた。尿毒症にまで進行して貧血状態に陥っている。

その結果、心臓に強い負担がかかるのであった。

現に啓介も眼の前で倒れた男を知っている。トイレに立って、そのまま廊下で昏倒してしまったのである。その男も再入院したうちの一人であった。結局は自宅療養中に無理をしてしまうらしい。給付を受ける都合で一時復職し、その過労で倒れた人もいる。元気な

ように見えても、やはり病人は病人なのであった。芳枝の目にも啓介は元気そうに見えたのかも知れない。妻がリユウと散歩をしろと言ったことには、いつまでたってもリユウと馴染まない父親の異常さを指摘しているようなところがあった。どちらかといえば啓介は陰気なほうである。会杜勤めもその性格のために大分損をした。

眼窩（がんか）の落ち込みが見る人に暗さを感じさせるらしい。頬骨も少し張っており、全体に彼の顔は豊かさの印象に欠けているようだった。無口になったのも、人の視線をおどおどとして避けようとしていたことに因を発していたのかも知れない。

リユウは芳枝の連れ子であった。本当の父親と生別したことがリユウの気持を暗くしていたという

こともいえる。

芳枝と一緒になって一年になる。彼は初めての結婚で、いきなり小学校二年生の男の子を自分の子供として迎えることになった。

啓介は生来の無口さもさることながら、初めから自分には似ていない他人の子供と接するのは苦手だった。余り父と子らしい遊びをしたことはない。

強いていえば彼が買ってやった帆船のプラモデルを二人で作ったことぐらいであった。

それもリユウのほうが余程精通しており、彼は仔細げに設計図を覗き込んでいただけだった。決して父子二人の共同作品ではなかった。啓介が入院してリユウはほっとしていたのかもしれない。六ヵ月一緒に暮らしただけである。

気障（きざわ）りな男と夏休みとは

いえ、朝から晩まで顔を見合わせているのはリユウにはきっと苦痛であったろう。それに啓介は入院している間にこの少年が変ったことに薄々気付いていた。

病気をする前はリュウは彼に対し何となくなく恥しそうであった。が、今はまるで違う。母親の生活上の愚痴をそのまま身につけた少年になっていた。

厄病神を文字通り芳枝は背負っていることになる。リユウにとって啓介の存在は邪魔にこそなれ、有用の意味は持たないはずたった。。経済面でも、愛情面でも啓介は何一つ父親としての責を果たてしていない。もうリユウも小学校の三年生の夏を迎えている。

柔らかなまま笑っていられる年ではない。大人のしるしみたいに心の何処かに、白い羽毛をちらっ

と覗かせているのかも知れない。足だってすっくりと伸びている。それに、彼のことばを無視して、コンクリートの上にしゃがみこんでいるリユウの後姿は啓介の眼には少し憎らしく写った。その背で、自分の立場を表しているみたいに、この少年は彼に背を向けているように見えた。

誰がひよこを殺したのか！

その日の朝のことを啓介はいまも痛いように覚えている―。夏の朝は、すでに明け初めた時から陽光に強さを煌（きらめ）かせているものである。寝つかれず、四時過ぎからうとうとと寝入ったために、啓介には朝が眩しかった。目覚めると強い光の矢がいきなり飛び込んで来たのであった。

もう六時を回っていたろうか。

リユウがコンクリートのベラン

ダに立っていた。ひよこを両手で抱えたまま泣いている。啓介は床に横になった姿勢のままでリユウの泣き顔を見ていた。

ぽたっと泪が落ちた。

まばたきしないのにリユウの眼からは大粒の泪が溢れ出た。きゅっと、リユウは下唇を強く噛みしめていた。

強い陽射しが啓介の眼を射た。啓介の位置から仰角に向けて、眩い空が開けていた。リユウが立っている肩口のあたりにも光は撥ねていた。切り取られたような鮮やかさがある一角であった。これは朝の光景ではない。啓介は眼を凝らして一人の少年の泣き顔を見ていた。

突然のこと、朝なのに南部鉄の風鈴がちちちりんと鳴った。ふいっと風が起きて、ふいっと通り

抜けていた。

リユウは段ボール箱の底に、静かにひよこの死体を戻した。そのままリユウはベランダの縁に坐りこみぼんやりと外を見ている。啓介が寝ている場所からはリユウの表情は見えない。いつまでも、そのままの姿勢でリユウは坐りこんでいた。

輝やいた色を持った空がリユウの後姿に遮（さえぎ）られた。少年のうずくまった姿の向うには小さな森があった。自転車道を越したところから森への小道は始まっていた。この二階の団地の一室からはほぼ五十メートルほどの距離である。

横臥（おうが）し、下から見上げている啓介の位置からも風に揺らいでいる木々の梢が見てとれた。

リユウが段ボール箱にひよこの死体を戻そうとして身を動かした

時、啓介は、とっさのことに眼を閉じた。眠ったふりをして啓介は明るい朝の中に身を投げでいたのである。本当はリユウの泣き顔を正視することが出来なかったのだ。怖いものでも見るように啓介は、ただ、眼を大きく見開いていたのであった。

夜半過ぎに眼が覚めた時、彼はいつものようにリユウが隣室に連れ去られるのに気付いた。芳枝はいくら酔っていても、必らずリユウを自分の寝室に運ぶ。

まるで、仮眠をしているように、リユウはいつもテレビの点いている居間に居直る。この言い方には、多分に、啓介の醒めた感情が込められていた。リユウは、芳枝の帰りを待っているのか、テレビを見ながら夜更かしをするのであっ

た。それも、彼と二人、黙ったままテレビを見るのであった。啓介は病身をおして、いつも、隣室に布団を敷いてやるのだが、リユウは眠る素振りは見せない。

夜半に、母親に抱かれて散歩の夢を見ることにこの少年は快さでも感じているのであろうか。甘えなのかも知れない。半分目覚めた状態で、この揺籃（ようらん）のあそびをリユウは楽しんでいるかのようだった。

啓介はわざわざリユウの寝顔を覗いたことはない。が、もしかしたら、八歳になるこの少年はうっすらと眼を開けて、快い夜中の散歩に身を預けているのやも知れなかった。大人の世界を半分目覚めた感覚でこの少年が見ていたのだとしたら、芳枝が語ることばや、無気力な彼の答え方、それに痴話

喧嘩にもひとしい男と女との感情のもつれ話などは、みんな、この大人の顔をした少年に知られていることになる。芳枝の口からは、いつも、不用意なことばが飛び出す。“お客さんはみんな男だからね”とか、“好きで働いているんじゃないわよ”といった類いの嫌な会話を、彼と芳枝は毎日のように交し合っているのだった。昨夜のことは啓介一人だけの胸の中にある。

いつもより芳枝の帰りは遅かった。その事を気にするほど、彼の体は回復していない。芳枝の体を求める気力はもう失せている。それに、このところ、連日の暑さが続いていた。骨の髄までだるい。小さな脚を持った蟻たちが、気だるそうに、彼の全身を這っていた。痛いのならまだいい。知覚がはっきりしているからだ。

が、この緩慢な蟻走感（ぎそうかん）にはまるで正体がないのだった。生暖かい風にとっぷりと身を浸しているといった感じなのだ。焦燥感が何処からともなく沸き出て来る。色でいえば黄色なのだ。

そんな色を思い付く。それも黄褐色の薄汚い色である。その色を瞼の裏にうっすらと泛（うか）べたものでなければ、その色については本当のことは分らないだろう。ただ、ぼんやりと掴み所のないままにその感じは、全身に広がっているのであった。

それから色には匂いのようなものがある。啓介が嗅ぎ分けている色濁（しきしょく）の世界には、ある種の病気の匂いがあるのだった。気だるさの色に、気だるさの匂い、それに、少し胸がむかついている。

起き上る気力もないままに啓介は芳枝が帰宅した物音を聞いていた。表でタクシーが止まり、Uターンしてから、また何処かへタクシーは走り去って行った。芳枝は補助灯の薄明りに照らされている居間の入口の所にぺったりと坐りこんでいるらしい。リュウの寝顔にでも見入っているのだろうか。それからふいっと立ち上り、台所に戻る。冷蔵庫の扉を開けて冷えた麦茶をのんだ。

飢えた音であった。

ごくりごくりと乱暴な嚥下（えんか）の音がする。啓介は一杯の麦茶を求めようと思ったが止めた。何か甘えのようなものがその行為にはあるように思えたのだ。だから我慢して眠ったふりをしていた。パチンと電灯が灯される。台所と居間との間の襖を閉めて行

けばいいのに芳枝はそのままにしていった。眩ゆさに彼は腹を立てた。何かにつけて芳枝は無神経なのだ。ぷるんぷるんと大きな音を立てて、今度は洗顔をしていた。何かにぶつかって大きな物音をたてるーそれらのことを一々注意することは大変だった。

それだけで啓介はくたくたに疲れてしまうだろう。それから三十分もたってから、芳枝は、再び、居間にやって来て、リユウを連れ去ったのである。

芳枝の酒臭い息が、また、啓介の胸を悪くさせた。

彼は一度も眼を開けなかった。

死体のように転っている限り、芳枝との間には諍（いさか）いは起きない。生ぬるい風になって、芳枝の無神経な仕種の一つ一つを許しておけばいいのだった。

それからー芳枝はあお向けになって眠る。だらしのない姿かたちで。母と子は一つ蒲団で寝入ってしまった。

が、啓介は暗闇の中で眼を凝らしていた。真暗闇というのではない。月明りなのか、街路灯の反射光なのか、薄明りが部屋の中には忍び込んでいた。暑いのでベランダの境い目のサッシの扉は開け放ってあった。余光が白い天井にほんのりとした影を投げている。生ぬるい風が吹く。口の中がねばっこい。生唾をのもうとすると自分の唾液がとても嫌な味がしていた。食べ過ぎた後のような不快さであった。やはり、黄色の匂いがあるー啓介は妙なことに気付く。

腎炎になると大抵は黄疸症状をみせる。顔色も、皮膚も、着ているものまでも黄色に染まるのであ

った。彼自身はそれほどひどい黄疸症状にはなっていなかったが、自分の病気のことを語るにはこの匂いを持った黄色について語ることが一番当を得たことのように思えた。強く意識していたのではないのだが、やはり彼も饐（す）えた匂いの病いに捉えられているようであった。そのことを考えると吐気がして来る。

彼はのろりと半身を起した。その時、敏感な啓介の鼻はひよこの体臭を嗅いだ。

中途半端に大きくなった今、ひよこは嫌な体臭を身につけてしまっていた。コンクリートの上に垂れ流す糞尿の量だって馬鹿にはならない。

それに小さな段ボール箱の中である。前々から啓介はひよこの存在に眉をしかめていた。

「どうせ死ぬと思ったのに、ひよこもこんなに大き.くなっちゃ始末に困るわ」

と芳枝もひよこの取り扱いに困惑しているようなことを、この前、言った。そんな感情もあったが、啓介はこの黄色の初毛を持ったひよこの体臭に生理的な不快感を強く持つようになっていた。

寝つかれないままに　彼はベランダに出た。森が真黒に塗り潰されていた。平べったい闇の森は、魔物みたいに、押し黙ったまま、彼と対峙（たいじ）していた。木々梢が立ち騒ぐ。見ていると怖くなった。深い喪屋（もや）の帷り見えた。いつまでも見つめていると死の底にされて行くような恐怖観念に取り憑かれた。同じ病室にいた二人の男が死んでいた。一人は彼よりも半年も前に入院したとい

った。その男は入院したまま、帰宅も許されずに死んだ。もう一人の隣りのベッドにいた男はまるで癲癇（てんかん）持ちのように、急に床に転倒し、口から泡を吹いて死んだ。

あの暗い森に、死者達が棲んでいる訳ではない。

深い眠りの森には違いないが、二人の男を思い起すほどの薄気味悪さが、闇の底にあったわけではない。死人の顔が暗闇に似合っただけのことだ。それに一人でベランダに出て、闇を凝視していることの異様さに彼が気づいただけの話である－彼はそのように自分にいい聞かせ、闇の森をしばらく見ていた。その時、啓介はまたひよこの存在に気づいた。狭い段ボール箱の中でがさこそとひよこが音を立てたのだ。嫌な匂いを嗅いだらまた胸がむかつき、彼は吐きそうに

ななって手で口を押さえた。うっという呻きの呻きの音を発した。本当にひよこの饐えた体臭を嗅いでいた。

その匂いだけではない。

いま眼の前にある訳ではないのに、彼は団地の外れにある養鶏場の前を横切った時のような強烈な匂いまで嗅ぎ取っていた。間違いなく彼は養鶏揚の前をこの真夜中にふいと通り過ぎていたのであった。

啓介は腹立たしさを覚えた。もう購（かま）うことなど何もなかった。むしろ乱暴に挑みかけていた。彼の右手は空気孔の一つに突き立てられた。闇を探ったら生暖いものに触れた。訳もなくひよこを掴まえていた。それも一発で首のあたりを握りしめていた。腹立たしさをその指先に込めることだけで、一羽のひよこは力を失なった。ゆっくりと破れ穴から手を引

いた。それだけのことであった。何故だか、ひよこの首を締めた右手の指の匂いを嗅いだ。

その癖、本能的にというべきか、彼は手を鼻に近付けた時、息を詰めた。匂いを避けたのに彼の昂ぶった神経は、匂いを嗅いだ時と同じ様に、胃壁を痙攣（けいれん）させた。右手の掌に、彼は苦い唾を吐いた。それから、彼は執拗に手を洗った。罪の匂いを消そうとでもするかのように。さすがに啓介は疲れ果てていた。

いまのいままで耳に入らなかったのに夜露に濡れた草叢から、ちろろろ、つ、つるーん、ち、ちちーと鳴く秋虫たちの唱和が戻って来た。ふっと息を継ぎたくなるような充足感に彼は浸った。小さな虫たちの声を聞き取ったことで、安らぎの気持がふいっと湧いた。

闇の間の、いっときの、それはさんざめきの声であった。

その虫の声を聞いているうちに、いつの間にか、啓介はふーと眠りに落ちたー。

芳枝が起き出して来て朝の掃除を始めた。朝といってももう昼に近い。のっそりと半身を起して啓介は狭いベランダに逃げた。

古い形の掃除機が足を引きずりながら敷居を越えて来た。ガタンと痛い音がした。音の喧しい掃除機である。

空気孔からはいつも生ぬるい風を吹き上げていた。触れると肌が汚されるような気にもなった。

むっとする気味の悪さだ。うろうろしていると掃除機は病人を襲う。枕元にまで平べったい吸盤が

押しかけて来て挨を吸い取ろうとする。彼は邪魔者にならないように身を交わす。万年床を二つに折ってから逃げ出すのであった。これも諍いを起さないようにするための知恵であった。

セミが、いっとき、わーと鳴く。

森に取り付くあたりの小道をリユウが歩いているのが見えた。気になり、ひよこの死体が入っているはずの段ボール箱を啓介は覗いた。すでに、ひよこの死体はなくなっていた。

どんな騒ぎがあったか、啓介は知らない。きっと、こっそりと、リユウはひよこの死体を持ち去ったに違いなかった。すでに、森のどこかに、ひよこの死体は埋められることになるのだろうか。

森の下草の深みの場所なら、ひよこの墓場には適しているはずだ

った。

リユウの様子のすべてが見えていたわけではない。

ひよこの死体をリュウが抱え取っているのか、どうか、遠い光景の中のことなので、仔細は確かめようはなかった。

ブナ、クマシデ、ミズナラなどが密生している森には自然の和音が息付いていた。セミの鳴声だけではない。小鳥たちの囀りも聞えて来る。尾長鳥やコジュケイなどが枝から枝へと渡り歩くのが、微かだが見えた。

団地のベランダを訪う雀達もひゅいひゅいと飛んでは安らぎの森に還る。カラスも多い。嫌な鳴声が死の予兆を知らせる声なのだとしたら、この団地に住む人々は次々に獰猛なカラスたちの好餌（こうじ）になることだろう。だが、

森の奥へと、たまには、足を運びたいものだと啓介は思うこともあった。本当なら、白分の幼時を懐しむ気持になるところだが、近頃の啓介はむしろ不快な感じを持つことが多かった。

見るものすべてが気だるい。眼に入って来る様々な光景はひとたび彼の視界に入ると皆な緩慢なものに姿を変えてしまう。素早い動きも、癇高い叫び声も、みんな遠い風景にすり変えられてしまうのであった。

風景の持っ明度とか、広がりが或る限界に来るとすとんと落ちるー。それは、急な翳りを見せる影にも似ていた。

太陽が雲間に落ちると雲が地表をなめるようにして影が走ることがある。その翳の変わり身の早さが、不意に彼の視界を灰黄色に塗

り変えるのであった。いままた、光を放っていた白輝色の眩ゆい森が見る間に夕暮れ時を思わせる翳りの気配を忍ばせ始めた。

一瞬、天空に舞う雲の流れに差配されて、彼の感覚はすとんと失速してしまう。粘っこい汗の匂いがする。生ぬるい粘気を持った黄砂（こうさ）がゆっくりと舞う。翳りは黄色味がかった残像を森の上に落とす。

体がだるい。皮膚の穴からじっとりと汗が滲み出ていた。そんな時は大低は微熱が出ていた。いまもそうだ。リユウはもう森の奥に姿を消していた。下草が茂る深い草叢にふっと呑まれた。

急坂の斜面が下には待ち受けているのだろう。つーつーと走って落ちて行くような唐突さでリユウの姿は草の穴に奪われたのであった

。掃除機の音は背後にもやって来た。芳枝は一言、二言、米粒のことで文句を言った。それから、掃除機はコンクリートのベランダに向かった。長い嘴を持った掃除機が、瞬く間に白い米粒を吸い込んだ。僅かな白さの代わりに、砂粒一つないすべすべしたコンクリートの地表がそこには残された。見るともなく、啓介はこの暴挙を見ていた。

もっとも、彼も止めろとは言わなかった。ただ見ていたのである。（そうか。リユウはあの手製のパチンコを手に森に入ったのかも知れないな）突然のこと、啓介は昨日の出来事を思い出した。

二股になった無骨い枝切れを、リユウが拾ってきた。そして、どこかの本で、作り方を学んだのか

、自分で枝を削り、リユウはパチンコ機を作った。

自転車の荷台にくくりつけられていた幅ニセンチほどのゴム紐がパチンコの引っ張りの部分になった。かなり強力なパチンコのはずであった。パチンコ玉は啓介が与えた。きのう駅前のパチンコ屋で久し振りに彼はパチンコをやった。三十分ほど玉を弾いたが、一進一退で玉は増えなかった。それでも受皿には百個近い玉が貯まった。半分だけ、ポケットに入れた。後の五十個ほどは直ぐになくなってしまった。彼は持続力に欠けていた。面倒臭くなって途中で止めた。五十個余の玉を残したのは投資額の元を取ろうというケチな魂胆からだったが、景品に換えるには少な過ぎた。そのまま、家に持ち帰ってしまった。罪滅ぼしという

訳でもなかったが、リユウに残ったパチンコ玉を全部やった。リユウはちらっと嬉しそうな表情を見せたが、直ぐ様、他人行儀な声で“ありがとう”と言った。啓介がパチンコ玉をやったので、それで、リュウはパチンコ機作りを思い立ったのであった。

リユウの帰りが遅いので、芳枝は先程から焦々していた。冷やしていた冷麦が少し伸びていた。

リュウがのっそりと帰って来た時芳枝が大きな声を出した。珍らしく叱ったのである。そのまま、リユウは黙り込んでしまった。

構わずに芳技は膳に箸をつけた。

啓介は冷麦を食べたいとは思わない。芳枝も食べろとは言わなかった。わざわざ言う必要もないということだろう。何の怒りなのかは分からないが、啓介はいわれの

ない怒りのようなものを感じた。それぞれが、それぞれの身勝手さで動いているーおよそ、一つ屋根の下で住んでいる家族とはいい難いだらしのなさなのであった。

別に夫と妻とか、父親と子供とかいった関係に、けじめとか、潤いを求めたのではなかったが、まるで、他人と他人が雑居しているような、よそよそしさが結婚以来、彼にはつきまとっていた。

もちろん啓介にも責はある。結婚するのが遅かったせいで無味乾燥な暮らしに彼自身も長年の習性で慣れ親しんできた嫌いがあった。つきつめて、彼もこの潤いのなさの原因を考えたことはない。

正直なところ、彼はあれこれと、家庭作りに思いを巡らす前に、この気だるい病いを背負いこんでしま

ったのであった。原因を作ったのは彼のほうかも知れない。

芳枝が一人で冷麦を啜（すす）っていた。その、ずーずーずーという音が、啓介には我慢がならなかった。しかし、啓介は腹立たしさにじっと耐えていた。リユウは手持無沙汰のまま、パチンコのゴムをひゅっひゅっと鳴らしている。“あのパチンコなら鳥が落せるな”と啓介はちらつと考えた。それは稚気な思いにつながっている。子供の頃には彼もパチンコに胸をときめかせたものであった。男の子なち誰でもそうだ。撃っ対象が欲しくなる。

きゅーっと一杯にゴムを引っ張ると、その引っ張りの強さだけの分だけ加虐的な気分になって行く。手に触れてみたい衝動をその時、啓介は身内に感じていた。気だる

い感じとはおよそ逆のそれは痛いい憧れの気持ちにも似ていた。刺激的な部分がそこだけ眼を覚ましているといった尖った感じなのであった。と、その時、思いがけず、リユウが強いことばを放った。

「ひよこを殺したのは、母さんだろ」

ぎくりとしたのは啓介のほうであった。きれいに吸い取られた米粒の上をなぞるように、リユウの裸の足はベランダのコンクリートの上を数歩、歩いた。

それからベランダの鉄柵に体を寄せ、改めて、母親の方に向き直って決然としたことばを吐いたのであった。

「このわたしが…。馬鹿なこと言ってるよ」

驚ろいたのか芳枝は一度、箸を下に置いた。が、また何事もなか

ったかのように、冷麦を口元に持って行った。

二、三日前、彼はリユウに「お母さんはひよこが嫌いなようだから、その内、始末されてしまうかも知れないぞ」と、余計なことを告げた。そのことを、リユウは憶えていて、母親相手にひよこ殺しの文句を口にしたのだった。

「父さんがそう言ってるよ」

それは名指しのことばだっだ。リユウはついぞ父さんなどといった事はない。そのことばは別の人間を扱うような冷めたさの響きを持っていた。もやもやしていた定かならぬ部分を、リユウはこの一言で一気に剥ぎ取った。

啓介と少年との関係を白日のもとにあからさまに投げ出して見せた。当の非難の主が啓介であることに、一瞬のこと、芳枝は呆れた

ような顔つきになった。
それから、強い視線を芳枝は彼に向けた。
「どういうこと？」
今度はは逃げられなくなっていた。これまでは逃げていたのに、この時ばかりは、真正面で顔を付き合わせてしまったのだ。
「そうじゃないかと言っただけさ」
「そんなこと言わないで！どうしてわたしがひよこを殺さなくちゃならないの」
「始末に困るつて言ってたじゃないか」
「あのさ。悪いけど、わたしはあんたほど変っちゃいませんよ」
「変わってる？」
「他の人よりはね。自分でもそうは思わないの？あなたならやりそうだわ。何にしても、ひよこを殺す理由なんてわたしにはありませ

んからね。わたしのせいにするなど、あなたらしいやり方だわ」

びしっびしっとパチンコのゴムが解き放たれた音をたてた。

何を撃つでもないのにリユウは同じ事をさっきから何回も繰り返していた。

ぴしゅわっと強い音になった。リユウは力一杯、ゴムを伸ばす。

枝木を支えている左手が小刻みに震えていた。きんっとした緊迫感が一瞬のことだが走った。

撓（しな）ったゴムが標的のない標的を把えていた。もちろん、弾は込められていない。すべて一人の少年の頭の中で一つの加虐行為が成し遂げられているだけのことだった。

芳枝にはこの真昼の殺戮の遊びが見えてはいないらしい。馬鹿らしくなったのか、また、つけ汁に

どっぽりと浸った冷麦を二本の箸でつまみあげた。やはりまずそうな音であった。それから浅漬けの胡瓜（きゅうり）をぱりぱりと噛み砕く。

「あなたも早ぐ食べなさい」

と芳枝はリユウを促す。やっとリユウはパチンコを手から放した。啓介はちらっとその敵意の込められた子供の玩具を見ていた。

枝木には生々しい傷跡があった。握りをよくするためにリユウが小刀で何条もの溝を刻んだのであった。

母と子が冷麦を啜っていた。本当なら、心和む夏の午後の一景ということになるのだろう。胡瓜を噛み砕く音だって、腹立たしい音というよりは、むしろ、健康な食欲の音というべきだろう。食欲もたしかになかったが、仲間に入るに

は少しばかりの勇気を必要とした。仕様がないので、啓介は横になったまま、じっと眼を閉じていた。健康なもの同士だけの食事が、何でもないことのように執り行われていた。

まるで別の世界の目常としてしか彼には理解出来ないことであった。決められている標準献立は一日に豆腐が半分、牛乳が二本、キャベツの葉二枚…といった内容のものであった。もちろん、塩分の取り過ぎはいけない。

そんな病人が、突然のこと、この母と子の暮らしに割り込んで来たのである。

うまく行くはずはない。

病人の顔をしたまま、啓介は、ただ、毎日毎日を耐え忍んで生きているだけのことであったのだー。翌日からまたリユウは米粒を撤

いた。元々は雀達は毎朝、このベランダに姿を見せていたのであった。ひよこの巣箱がなくとも、馴れるのは早かった。姦（かし）ましい朝の囀り声が、コンクリートの上を転った。そんな喧（やかま）しさに、啓介はその日の朝も早く眼が覚めた。雀たちのために餌を撒いたのであれば、少しは雀達の挙動に関心を持てばいいのに、リユウは、その時、すでに部屋の中にはいなかった。突き出したテレビアンテナの上に、ばさっと羽音をたてて一羽の雀がやって来た。忙（せわ）しく小さな首を右に左に動かす。チチチ、チュンと鳴いてみせた。ひょいと横飛びに歩幅の分だけ位置をずらす。頬の黒点が眼につく。瓢軽（ひょうきん）に一人前の表情をして見せた。少しは考えているふうで、見様によれ

ばその様は小憎らしい。
ひょいと音もなく降下し、コンクリート上に小さな脚で立つ。
啓介はそっと半身を起した。
それなのに斥候（せっこう）役の雀はぱさっと羽音を立て軽やかに逃げた。まるで風の羽を翻したような素早さであった。
大人が眠っている朝まだきから起き出してリユウは一体何処へ足を運んで行ったのか。室内にはその姿はなかった。夏休みのラジオ体操は、ひよこが啓介の手にかかって死んだ日に終ったはずであった。リユウが小刀片手にパチンコを作りあげたのもあの日のことであった。
とすると、リユウはパチンコを手に、朝から森に出かけているのだろうか。
ほとんど一日、リユウはこのと

ころ森で過ごしているようだった。二日が経ち、三日が経って、やっと啓介はリユウの不審な行動に気がついた。それと共に、朝早くやって来る雀達を迎える習慣を、彼も持つようになったのだった。

一日目にお馴染（なじ）みになった雀はきまって斥候役を引き受けた。いつも、飛んで来る道筋まできまっていた。啓介が見ている時は米粒を啄むことはなかったが、少しうとうととしていたり、その場に居あわせない時には、要領よく雀達は餌をくわえ込んでいるようであった。気がついて、そちらへ注意を向けると、一度に、ぱっと雀達は飛び立った。啓介が寝ている場所と餌場とは十メートル近い距離があったので、近づく間に雀達は気配に驚ろいて飛び立ってしまうのだった。

で、三目目からは開け放ったサッシの扉の直ぐそばに啓介は床を敷いた。

首を回せば、ほぼニメートル以内で餌場が見える位置であった。

雀に餌をやることに芳枝は文句をいわなくなっていた。芳枝には雀達に餌をやるリユウが心やさい少年に見えたに違いない。いかにも子供らしい、しかも、誰にでも憶えのあることであった。

雀達がばねで弾かれたようにぴょんぴょんと飛ぶのが啓介には一番面白かった。

まるで遊び場を求めてやって来たような軽快な跳躍ぶりを見せ、斥侯役の雀が、餌を啄むと、ベランダの鉄柵の下の隙間から二、三羽の雀達がひょいと顔を出す。突き出たコンクリートの庇（ひさし）の上にでも止まっているらしい。ぱ

っと飛び降りてコンクリートの下辺に雀達はとりつく。それから身を翻（ひるがえ）して、雀達は鉄柵の下を潜り抜けるのであった。鉄柵に添ってしつらえられている排水用の溝を一足跳びに越す。

逃げる時はまるで経路が違う。ぱさっと羽を広げて、そのまま、高く空に飛び立つ。身を翻す訳でもないのに、ちゃんとベランダの外に小さな体は浮いていた。団地の花壇の上を飛んで雀達は森に向う。もう、その時は安心しているのか、垂直に胴体を飛翔させており、地面に着きそうになって始めて、二、三度、ぱたっぱたっと羽を動かせて見せるのだった。落ちるはずはないのだが、よく見ていると失速しそうになるのであった。そのようにして、雀達は身軽に飛んで見せた。啓介はつぶさに雀達を

観察しながら、楽しみの部分もふくらませていたのであった。

四目目の朝、彼は背後からリユウに観察されていた。

いつもの通り、彼は雀達の餌を啄む囀りの声に起された。

寝返りを打つと一度雀達は、ぱっと飛び散ったが、また、白い米粒の回りに集って来た。ガラス扉の陰に半分顔を隠して彼は雀達の朝の食事ぶりを眺めていた。

何となく人の視線を感じて、彼がふっと後を振り向いたら、半身を起したままのリユウがじっと啓介のほうを見ていた。

部屋を仕切る襖（ふすま）は半分開けられたままになっていた。啓介がリユウの方を振り返った時、何を恐れたのか雀達はまたぱっと空に飛び、小さな礫（つぶて）になって森の方角に逃げていった。

リユウは無表情な顔をこちらに向けていた。長い二本の手が、手持ち無沙汰げに足先きを掴んでい・た。まるで屈伸運動をするようにリユウは上半身を前に傾けていた。そのまま弾みをつければ、勢いよく立ち上れるだろう。

精悍（せいかん）な力をこの少年は内に秘めているように見えた。リユウは次の瞬間、勢いよくはね、さっと立ち上った。パチンコを手にいつものように玄関に向う。それから二、三分の後、彼は森への小道を朝露を分けながらゆっくりと上って行くリユウの後姿をみとめた。まるで、自分の狩場に向かうようなゆったりとした足取りであった。啓介はリユウの姿が完全に森に呑まれた時、初めて安堵の胸を撫でおろした。

妙な話ではあった。

楽しみを盗み見られたばつの悪さよりも、雀どもに心を奪われている自分の柔らかな心を見られたことのほうが啓介には気になったのであった。

小さ生き物に寄せる心は、盆栽造りの老人にも似ていた。

もっと俗な見方をすれば余命幾許もない死刑囚が、雀と鉄棚の窓越しにやって来る雀達と心を交わす、あの、出来すぎた話とも何処か似ていた。

彼は自分に対してむきになってみせた。如何にも弱々しい。

病気を負っている中年男のこれは飼われた姿のように思えた。三十五という年にはそんな弱々しさはない。女々（めめ）しいのだ。

そんな自分自身の柔らかな心の内をリユウに見抜かれていたのだとしたら彼の立場は失くなる。そ

れでなくとも彼はすでに一家の主としての地位を失なっているのであった。凛（りん）とした姿勢に欠けていた。その夜のこと、啓介は考えた末の行動に出た。

いつものようにリユウは居間で眠りについた。背を丸めるようにし横向きに眠っていた。寝ている間は胎児のようにも見えた。あどけなさも残っている。彼はリユウの勉強部屋に侵入した。

彼は目的を持って忍び入った。パチンコ玉の在り処を彼はあちこちと探った。机の一番下の抽出（ひきだ）しから彼は十個の鉄の玉を見つけ出した。後の四十個は何処を探しても見つからなかった。すでにリユウは使ってしまったのか。それにしてもこの十個という数は意図的な数字のように彼には思えた。それにこの十個は別扱い

されていた。
が、溝わず、彼は二個の玉をその中から盗み取った。これは明らさまな挑戦行為なのだ。はっきりとしているほうが望ましい。元々はパチンコ玉は彼がくれてやったものであった。これは盗みではない。それから机の上に無造作に投げ出してあるパチンコに彼は手を伸ばした。
二個の鉄の玉と、強い衝撃を秘めた飛び道具であった。
これだけで充分に兇器になり得た。ひとまず彼は敷き布団の下にパチンコ玉を隠した。何だか落着かなくて、また取り出した。
銀メッキされた鉄の玉をパチンコのゴムの真中の部分に押しつけた。右手の拇指（おやゆび）と人差し指で掴み取った。柄の部分の傷口は左手の掌の中にすっぽりと入

った。ぐーとと引き絞った。一杯にゴムが伸びた。あやうく右手の指先きが持って行かれそうになっだ。強い引きであった。

引っ張ったり、戻したり、同じことを、彼は何度も繰り返した。そうやって弄んでいると折角の緊迫感が失せて行きそうに思えた。で、止めた。また元の場所に戻す。リユウの寝顔は、隣りの部屋のほうに向けられていた。そのまま、彼は寝床で横になった。奇妙に眼が冴えていた。〝眠れそうにないな〟と一人呟いた。時計を見るともうとっくに午前一時を過ぎていた。その内、彼はうとうととし眠ってしまった。

芳枝が帰って来た気配で彼は眼を覚ました。

時計の記憶につながっていた訳ではないが、時計の針を見た。三

時半になっていた。ずいぶんと遅い帰宅であった。

別にそのことで神経を尖らせていたのではないのだが、啓介は男と寝て来た女の素振りを闇の向うに見ていた。つぶさに、眼を開けて見ていたのではないが、瞼の裡に、柔かく触れる女の息遣いを感じていたのであった。

いつもの夜より荒々しさがない。扉の開け閉めも、着物の脱ぎ方も柔らかな風を含んだような挙措（きょそ）になっていた。

その癖、何処かに気だるさを残してもいた。ふっと吐く息にも、足袋を擦る足音にも、心なしか疲れのようなものが残っていた。帰宅の時間が遅いという理由だけではない。つーっと、と冴えた空気が冴え渡る。啓介の捉えた微かな感覚であった。〝ああ、この女を

撃つことが出来るな”と啓介は思った。手近かな場所に、いま、彼はしなりを撓（た）めた凶器を備えていた。

もし、この女の健康な遊びを許せないならの話であった。いかにも、男と女との絡み方というものはあっけらかんとしていた。

そうに違いなかった。

裸の男と女に病いの翳などありはしない。気だるいものがあったとしても、それは歓びのあとの充ち足りた疲れというものだろう。啓介の妬ましさの感情は、そんな健やかな営みの火を燃やす　世間一般の男と女に向けられていたのであった。芳枝がリユウの足元にふっと立った。いまから、背を屈め、大きくなり過ぎたリユウを重そうに両の腕に抱えあげる。立ち上がろうとする時、芳枝はいつも重

さにたじろぐ。
もっとも不用意な、弱い姿勢を見せる一瞬であった。が、啓介は撃つのを止めた。芳枝が他の男と寝ることには怒りがこみあげて来ない。彼は生々しい男と女との裸像を、鮮やかな相対図として頭の中に思い描いていたのではない。
だるい体を持った男が、それとなく情事の匂いを嗅いでいただけなのであった。
芳枝を強く責める気持は沸いては来ない。ただ、気だるさを持て余している自分の姿が惨めなものに見えただけのことであった。
だから、芳枝が不用音な姿勢でリユウの上に屈みこんだ時も、啓介はいつもの夜のように、仮死を装った寝姿のままで芳枝を見逃してやったのであった。
やさしさでも、申し訳のなさでも

ない。気だるさに慣れ親んでしまった者の習性のままにであった。

そんな柔らかな姿勢で目を閉じていたら、いつの間にか、啓介は眠りに誘われそうになったー痛い部分を彼は呼び起そうとして努力した。

明日の朝、彼が決行しようとしている雀落しのことを彼は一つのドラマの筋書きとして組み立てようとしていた。あの先見役の雀がぴょんぴょんと楽しそうに跳びはねながらやって来たら、彼は迷うことなく、狙いすまして玉を放つ。手製の飛道具が空気を鋭く叩く。ぴしゅわっ！と頼を風が打つ。

拇指と人差し指で掴み取られていた鉄の玉は真直線に彼の標的を襲う。わずか二メートル足らずの距離であつた。よもや、射ち損じることはあるまい。いや、彼は試し

射ちを何度かやってみた訳ではない。それに、パチンコは正確無比の計算をしてから作られた訳でもない。ゴムの撓（たわ）みだって、何度も使っているうちに伸び切ってしまう。歪みがないとはいえない。射ち損じる率のほうが高いのかも知れなかった。二発目は一発目の不意の襲来に懲りてもう雀達はベランダにはやって来ないだろうか。

そうなると確かな殺戮の証拠が残せなくなる。雀達は、どういう訳かこのベランダに寄りつかなくなったという何でもない話になってしまう。何のために雀を射つのか。とうせのこと、彼はひよこの柔らかな首を締めた男なのだ。リユウは憎みこそすれ、親愛の情は彼には寄せては来ないだろう。

それに、リユウは彼の雀を狙っ

ている一雀に餌をやるのは何かリュウに目的があってのことに違いない。

初めは、ひよこが死んだために、小雀達に餌をやる気になっていたのかも知れない。いわば感傷的な行為である。

が、きのうの朝、彼が見たリュウの目は、たしかに、獲物を狙っている時の鋭さを持っていた。

もしかしたらリュウは彼に復讐を意図しているのではないか。

彼がやる前に、リュウは見事な射撃の腕で、彼の目を楽しませてくれたあの雀達を射つのではないか。何のために森の奥へ毎日のようにこの少年は足を運ぶのだろう。

それにパチンコの玉だって少なくも四十個は無駄にされていた。本当に森の中で生きた対象物を射ち落しているのかも知れない。木

々の枝で戯れている小鳥達を、少年の眼が鋭く射ていたとしても少しも不思議ではない。一羽ずつ一羽ずつ、群れから離されて濡れた草葉の上にぱさっと落ちる。青い空が梢の上には広がっていて、風が森をざわめかせる。入道雲がもっくりと空の上には頭をもたげていることだろう。

空がぐるりと巡った時、リュウはたしかな獲物の手応えを、ぴしゅわっという空気を裂く音の中に聞く。まさか、そんなことはあるまい。別に啓介が生き物を殺すことを教えたのではない。たかが一人の少年だと、その時、啓介は自分の想像領域の中で意地悪く構えている少年の姿を打ち消した。自分のために、彼は柔らかな論理を思い付くー見事命中するか、どうかは、まさしく偶然性に支配され

ている。恐らく当ることはないだろう。何万分の一の確率だ。まさしく偶然以外の何ものでもない。

一羽の雀は彼の意志の世界で一度は殺されるが、鮮やかな飛翔を見せて生き返るかも知れない。その様を、啓介はなぞるようにして頭の中に描いていた。やがて、眠気に誘われたのか、それらの刺激的な場面は、緩慢なぼやけた絵にと変えられて行った。まるでスローモーションの持っ気だるさの結末が用意されているようでもあった。もう、夢の中に身を置いているのかも知れなかった。

彼の手から放たれたパチンコ玉は当ったような当らないような不たしかさで、ぼやけた標的に向ってゆっくりと飛んで行くように見えたー。

そんな曖昧（あいまい）な夢を

見ているうちに、今度は本当に眠りに落ちてしまった。やはり微熱が出ているせいか、肌がじっとりと汗ばんでいた。もう明方に近いはずで、涼しさがあってもいいのに、啓介だけは、やはり、熟を持った気だるさから解き放たれてはいなかった。急に疲れが出た感じだった。啓介は柔らかな死体の一つになって、打ち捨てられたまま、眠りの底に引きずり込まれて行ったー。

眩い朝の陽光が、啓介の枕もとにまで、きっかりとした光線を投げていた。それでも、啓介は呆けたように眠っていた。見事に、リユウの手で、決着はつけられていた。ベランダのコンクリートの上には狙い撃たれた一羽の雀が転がっていた。小さな嘴のあたりには血がこびりついていた。

用心深い雀達の習性を考えれば、この哀れな標的は、一発で仕止められに違いなかった。何かに向けてリュウは引金を引いたのだ。引金を引かせたのは啓介ということになるのであろうか。

口には出さないが憎しみの感情を露わにしていた芳枝の心が、この少年には分かっていたのかも知れない。

狙い撃たれた一羽の雀は、やはり、呆けたように、白く、眩い光の中に捨てられていた。ふいっと、飛ぶ身の軽さが、ここでは見事に奪われていたー。

《了》